

第153回東京オペラシティ定期シリーズ

3月9日(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第982回サントリー定期シリーズ

3月10日(金)19:00開演 サントリーホール

第983回オーチャード定期演奏会

3月12日(日)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

3/9

3/10

3/12

指揮：アンドレア・バッティストーニ

オルガン：石丸由佳*

コンサートマスター：近藤 薫

ベルリオーズ：序曲『ローマの謝肉祭』Op. 9(約10分)

カゼッラ：狂詩曲『イタリア』Op. 11(カゼッラ生誕140年)(約20分)

- I. レント、グラヴェ、トラジコ；コン・モルタ・ファンタジア
- II. レント・アッサイーロンターノ
- III. アレグレット・グラツィオーソ、ポーコ・モッソ
- IV. アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ：フェストーソ、コン・アニモ

－ 休憩 (約15分) －

サン＝サーンス：

交響曲第3番 ハ短調 Op. 78『オルガン付き』* (約35分)

- I. (第1部) アダージェーアレグロ・モデラート(第2部) ポーコ・アダージェー
- II. (第1部) アレグロ・モデラートープレスト(第2部) マエストローアレグロ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)|

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura (3/12)



※演奏中や曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

※演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なるお席への着席をお願いすることがございます。

※演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場については、楽曲の進行により係がご案内いたします。ご入場いただけない場合もございますので、ご了承ください。

※演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

※演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。国際的に頭角を現している同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者、2016年10月東京フィル首席指揮者に就任。

『ナブッコ』『リゴレット』『蝶々夫人』（二期会）、グランドオペラ共同制作『アイダ』のほか、ローマ三部作、『展覧会の絵』『春の祭典』等数多くの管弦楽プログラムで東京フィルを指揮。東京フィルとのコンサート形式オペラ『トゥーランドット』（2015年）、『イリス（あやめ）』（2016年）、『メフィストフェレ』（2018年）で批評家、聴衆の双方から音楽界を牽引するスターとしての評価を得た。同コンビで日本コロムビア株式会社よりCDのリリースを継続している。

スカラ座、フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場、マリインスキー劇場、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界の主要歌劇場・オーケストラと共演を重ねている。2017年には初の著書『マエストロ・バッティストーニのぼくたちのクラシック音楽』（音楽之友社）を刊行。

2021年、東京フィルとの録音『ドヴォルザーク新世界&伊福部作品』欧米盤が欧州の権威ある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」交響曲部門（20-21世紀）を受賞した。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>

Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>



©Naoko Nagasawa

オルガン

石丸由佳

Yuka Ishimaru, organ

シャルトル国際オルガンコンクールで優勝、併せてJ.アラン賞受賞。ヨーロッパ10カ国以上の各地、および日本全国でリサイタルを行っている。

東京藝術大学卒業、同大学院修了。デンマーク王立音楽院、ドイツ国立シュトゥットガルト音楽大学修了。両国家演奏家資格取得。

国内の主要オーケストラはもとより、リヨン国立管弦楽団やシュトゥットガルト州立管弦楽団とも共演。

テレビやラジオへの出演も多い。これまでにない企画演出やプログラミングは各所で高い評価を受けており、オルガンの普及、教育プログラムにも尽力している。2020年4月より新潟市民芸術文化会館りゅーとびあ専属オルガニスト。武蔵野音楽大学非常勤講師。ココペリオルガンスタジオ / 教室主宰。

YouTubeチャンネル : <https://www.youtube.com/c/YukaIshimaruorgan>

楽曲紹介

解説＝藤田 茂

リュリはイタリア人だった。その事実、われわれは素朴に驚く。なんとなれば、リュリこそは栄華をきわめたブルボン朝に咲きいでたフランス・バロック音楽の王者であり、音楽におけるフランス性の父だと考えられているからだ。実際、リュリはイタリア人だった。それが教えてくれるのは、フランスとイタリアの芸術交流は、かくほどに深いものであるということだ。

本公演で演奏されるのは、フランスのベルリオーズ、イタリアのカゼッラ、そして、フランスのサン＝サーンス。そこに聞こえるのは、この交流の結果であり、また、それ自体の原動力となってきた、広い意味での地中海精神（あるいは、それを受け継いだラテン精神）である。そのシンボルは「輝く太陽」「青い海」「白い雲」。そこに満ち満ちた、すがすがしい空気を胸いっぱい、吸い込みましょう。さあ、みなさんご一緒に。

ベルリオーズ

序曲『ローマの謝肉祭』Op. 9

フランスにおけるロマン主義の体現者であったエクトル・ベルリオーズ（1803-1869）。彼は、1830年のローマ賞音楽部門の覇者であった。ローマ賞というのは、絵画・彫刻・建築・音楽の各部門で競われる、ローマ留学特典つき国家芸術賞のことで、これを征したものは、国家の芸術エリートの仲間入りができた。若き芸術家のたまごたちにとって、喉から手が出るほどに欲しい賞であったのも当然だろう。このローマ賞は、まさにリュリの時代に起源をもつ「伝統と格式」の制度だったから、関わった人物たちの権謀術策、賞賛とやっかみ（また、それらの混合）の話には事欠かない。ベルリオーズも「回想録」ではローマ賞のことを悪し様にいいながら、実際には4度もチャレンジし、27歳の年に、ついにこれを獲得したのである。

その褒賞かつ義務としてローマに留学した若きベルリオーズは、そこで実際に目にした「ローマの謝肉祭」に正直、少し引いた。フランス語では「脂肪の日」とも言われる、聖週間前の飲めや歌えやの乱痴気騒ぎは、彼にとっては「何が楽しいの

か全然わからない」ものだったからである。しかしまた、ベルリオーズが、その狂気すれすれの光景に生命力の爆発を見たのも確かである。16世紀のローマを舞台とするオペラ『ベンヴェヌート・チェリーニ』(1838)において、ベルリオーズは「ローマの謝肉祭」の場面をリアルに再現したあと、その素材を活用して、今回演奏される管弦楽のための演奏会用序曲『ローマの謝肉祭』を作曲したのだった。

ベルリオーズ自身が指揮をした1844年2月の初演から、この序曲は熱狂をもって迎えられ、即座にアンコールされたという。以後、序曲『ローマの謝肉祭』はベルリオーズ最大の「ヒット作」となり、現在でも名指揮者たちのバトンのもとで、常に加速し、前進していく圧倒的な音楽の力で、聴くものを魅了しつづけている。

[作曲年代] 1843年 [初演] 1844年2月3日、パリ、サル・エルツにて作曲者自身の指揮による
[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(タンブリン、トライアングル、シンバル)、弦楽5部

カゼツラ

狂詩曲『イタリア』Op. 11

アルフレート・カゼツラ(1883-1947)は、イタリア芸術音楽史において「80年組」と呼ばれる世代に属している。実に彼は、レスピーギやマリピエツロなどともに1880年頃に生まれた一群のイタリア人音楽家のひとりであり、プッチーニの国際的業績を発展的に受け継ぎ、主に器楽の領域でイタリア近代音楽を明け開くという歴史的使命をになった。一般に「80年組」の音楽家たちは、ドビュッシーを中心とするフランス近代音楽の影響、また、リムスキー=コルサコフに代表されるロシア近代音楽の影響を強く受けたが、この影響は、模倣を促すよりも、彼ら独自の音楽を創りだす触媒として働いた。

本公演で演奏される狂詩曲『イタリア』は、その証明ともいえる作品である。作曲時、26歳であったカゼツラはまだパリにいて、フランス楽壇の国際的スターであったドビュッシーを日々、意識せざるをえなかった。しかし、それゆえにこそ、若きカゼツラは、これに精神的な反旗をひるがえし、(当時、「ドビュッシズム」の言葉とともに理解されていた)繊細・洗練の美の逆を行く、大胆かつ直截的な「イタリアの音楽」を、この作品で実現しようとした。

イタリアの国民的音楽を! そう考えたとき、彼が(他の国民主義の音楽家にならって)自国の民謡に素材を求めたことは、よく理解できる。初版の楽譜にカゼツラ自ら記しているように、この狂詩曲『イタリア』では、第1部に4つ、第2部(終結部)に3つのイタリア民謡が用いられている。

そのうち、圧倒的な効果を発揮するのは、あの「フニクリ・フニクラ」である。無論、これにはルイージ・デンツァという作曲家がいたわけで、本来の意味での民謡では全然なかったわけだが、カゼツラはそれを分かったうえで、もやは「国民歌」であったこの曲を、民謡と同等なものとして堂々と利用した。そのようなおおらかさ、また、そのような熱さこそ、イタリア的というにふさわしい。

【作曲年代】1909年 【初演】1910年4月23日、パリ、サル・ガヴオーにて作曲者自身の指揮による

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え※記譜上は1番だが慣例的に3番が持ち替え)、E♭クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タン布林、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、鐘、タムタム、グロッケンシュピール)、ハープ2、弦楽5部

サン＝サーンズ

交響曲第3番 八短調 Op. 78『オルガン付き』

カミーユ・サン＝サーンズ(1835-1921)は、近代フランスの国家的な音楽家であった。国際的な名声をもつ作曲家、ピアニスト、指揮者であり、かつ、「大統領の教会」たるマドレーヌ寺院の正オルガニストを長く務め、また、同時代の音楽創造をサポートする国民音楽協会の共同設立者にして共同代表となったひと。彼の死が国葬をもって追悼されたといえ、いかに生前のサン＝サーンズがフランス楽壇の重鎮であったかが知られるだろう。そのサン＝サーンズの生涯最大の成功作が、オペラ『サムソンとデリラ』、ならびに、『オルガン付き』のニックネームをもつ交響曲第3番であった。

この交響曲第3番が作曲された19世紀後半は、ベートーヴェンを絶対のモデルとしつつ、それを独自に発展させた様々な交響曲が生み出された、いわば交響曲の「第2の黄金期」であった。新しい交響曲が群雄割拠するなか、サン＝サーンズの武器となったのは、やはり「明晰さ」。「明晰でないものはフランス語ではない」

3/9

3/10

3/12

という、明らかに明晰さに欠ける「迷言」がひとびとの口にのぼったのも今は昔、この「明晰さ」とは決してフランスの専売特許ではなかった。「明晰さ」とは、実のところ、ひろく地中海精神の立脚するところのものであり、場合によって「古典的」の言葉とともに理解された精神的態度であった。先にも話題にした「ローマ賞」を制することは叶わなかったサン＝サーンスだが、彼のなかには、複雑な書法のなかにあってもゆるがない、この明晰さの光が確かにあった。

サン＝サーンスの交響曲第3番は、なによりも編成の大きさによって知られている。一般に「3管編成」と呼ばれる大規模なオーケストラにピアノ(4手)、さらにオルガンが加わるのだから相当だ。しかしながら、大音量のなかでも、響きが透明さを失うことはない。ぜひ、この交響曲でもっともパワフルな響きがつくれる、最後の最後の部分に注目してもらいたい。そこから聞こえてくるのは、もっともシンプルな音階、ド・シ・ラ・ソ・ファ・ミ・レ・ドなのである。

全体は2楽章からなるが、これは音楽におけるフランスの古典時代に他ならない、フランス・バロックに特徴的な舞曲の構成を援用したものだろう。それでも、各楽章は2つの部分に分かれるから、結果的には、急・緩・舞曲・急という交響曲の標準構成が実現されることになる。このとき、各楽章の前後を区切る信号の役割を果たしているのがオルガンだというのは、いかにもサン＝サーンスらしい明晰さへの愛だった。実際、そのおかげでわたしたちは、音楽の区切りをはっきりと聞き分けることができるのだから。

サン＝サーンスいわく、「この作品でわたしはすべてを出し切った」交響曲第3番は、まさしく彼の力作であり、明晰さの凱歌であった。わたしたちの心に「輝く太陽」「青い空」「白い雲」が見えるだろうか。

【作曲年代】1886年 【初演】1886年5月19日、ロンドン、セント・ジェームズ・ホールにて作曲家自身の指揮による

【楽器編成】フルート(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(太鼓、トライアングル、シンバル)、オルガン、4手ピアノ、弦楽5部

ぶじた・しげる／フランス政府給費留学生としてパリ第4大学(ソルボンヌ)に学んだあと、東京芸術大学で博士号を取得。現在、東京音楽大学教授。専門は、近現代のフランス語圏の音楽理論と音楽文化史。メシアン、デュティユー、ブーレーズ等の論考多数。訳書としては、ヒル&シメオネ『伝記オリヴィエ・メシアン』(音楽之友社)。